



KANSAI
関西
近代化遺産
Heritage of Industrial Modernization
紀行 [第2回]
Junichi Shimomura

下村 純一(しもむら・じゅんいち)
写真家、早稲田大学・武蔵野美術大学
講師。1952年東京生まれ。早稲田大学
第一文学部で美術史を学んだ後、フリ
ーの写真家となり、ヨーロッパの近代建
築の取材、評論活動などをはじめ。主
な著書は、『織りなされた壁』(グラフィ
ック社)、『不思議な建築』(講談社現代
新書)、『アール・ヌーヴォーの邸宅』(小
学館)、『銭湯からガウディまで』(クレオ)、
『感性のモダニズム』(学芸出版社)など。



ハイキングコースに整備された湖畔の景観は、
どこまでも深く、静かだ

■ 布引五本松ダム

(ぬのびきごほんまつダム)

神戸市中央区にある、六甲山麓を流れる布引
溪流を布引の滝の上流でせき止めてつくられ
た日本最初の重力式コンクリートダム。1900
年(明治33)の竣工当時は日本最大の洋式ダ
ムで、以来100年以上の年月を過ぎた現在も
水道専用ダムとして使用されている。2001年
(平成13)からは大地震などの災害に備えて大
規模な改修工事が行われた。このダムを含む
水道施設は、2006年(平成18)、近代化遺産
「布引水源地下水道施設」の名称で国の重要文化
財に指定されており、厚生労働省の「近代水道
百選」にも選ばれている。

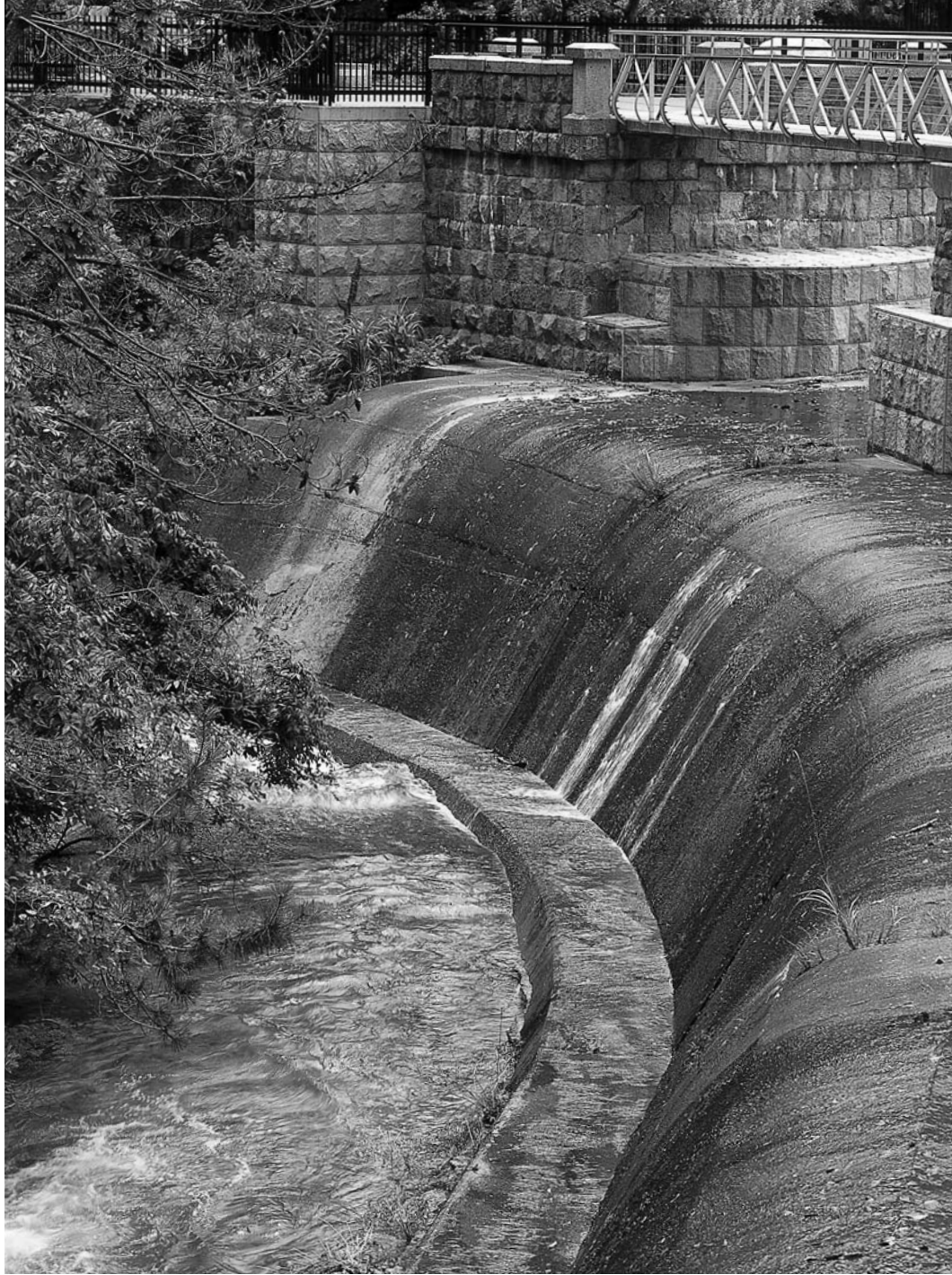
写真文 下村 純一

■ 近代上水道整備の先駆けとなった上水道用ダム — 百十歳、いまだ現役 — 布引五本松ダム



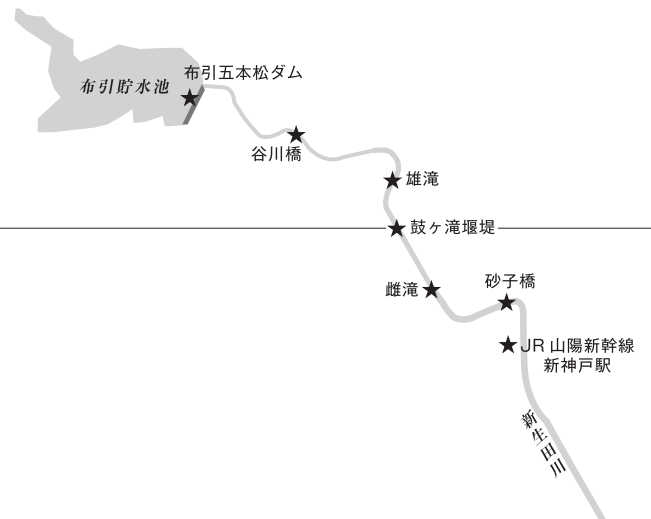
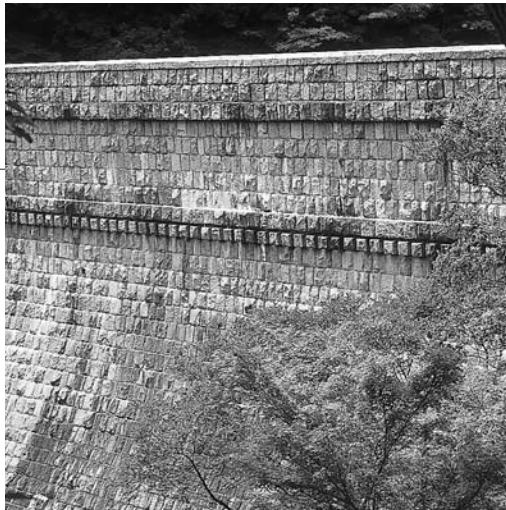
布引五本松ダム全景。石垣に草を宿し、まるで古老のようなたたずまい

滝のような美しさのダム放水路と、
復元された明治時代の管理橋



日本の近代医学の父といわれるベルツは、
来日した明治9年から数十年に及ぶ日記を
残している。その日記には、明治10年秋に、
中国から潜入したコレラが横浜、続いて東京
に出現したと書かれている。また、その頃コ
レラを予防する手段はない。発生前の衛生管
理と発生後の蔓延防止にベルツらは腐心し
たようだ。開国は、日本にはなかつた負の事

物にも門戸を開いてしまったわけである。
コレラ発生に対しては、その恐ろしさを熟
知していた居留地の外国人たちが、いち早く
反応し、衛生面から、まず長崎で上水道施設
の整備を声高に要求した。いわば外圧に屈し
た形ではあったが、明治20年前後に開港地を
手始めにした上水道というインフラが、日本
にも整えられていくことになる。



建築で軒を納める装飾を目的とする歯型飾りが
土木建築物に彩りを添える



いかにも明治時代を思わせるレンガ積の砂子橋。
中を上水道管が走っている

ダムへの山道、生田川に架かる谷川橋は
大正時代のコンクリート・アーチ橋

「布引五本松ダム」の建設も、明治22・23年に神戸で流行ったコレラが直接の引き金となったようだ。そして当時、日本最大かつ石とコンクリートを併用し、その重量を利用して水をせき止める方式としては日本最初のダムが六甲の山中に完成した。明治33年のことである。そして、約20万人だった神戸市民への給水がはじまる。建設に携わったのは吉村長策と佐野藤次郎。さすがに明治も後半ともなると日本にも優秀な土木技師が育っていた。

今、優雅な曲面をみせるそのダムの石垣の前に、つくった人たちの苦労を思わずにはいられなかった。石垣の目地はすべて上から改めてつめ直し、ダムの水面位置を示すがごとく、歯型飾りを一筋走らせて美しさを演出する。大型工作機械のなかった頃、すべてが人力によってなされた術なのだ。その緻密な施工があつて初めて、百十年を経てもなおダムは現役でいられる。

この日、私は新神戸駅裏手からはじまるダムへの山道を、実に軽い気持ちでのぼりだした。砂子橋か、いいレンガアーチだと、最初は景色を愛でる余裕があつた。ところがダムまでは、たかが200メートルほどの上りのはずが、いつまでたつても着かない。途中からはのぼることだけに必死となり、全身汗まみれで写真の一枚も撮らずに、とにかくダムへたどり着くのに1時間かかってしまった。私の機材は8kg、対して同じ山道を工事の人足が3人がかりで担ぎ上げたセメント樽は170kgだったという。優雅さの陰に潜む先人たちの努力に、改めて脱帽である。

和歌にも詠まれた名勝・布引を象徴する雄滝。ここから200m近い険しい上り道が待っている



川沿いにある鼓ヶ滝堰堤も、ダムの関連施設で明治時代の遺構